

復活節第2主日の説教

金 大烈 神父 2011年5月1日(日)

《あなたがたに平和があるように 一心の落ち着き、静けさを保ちましょうー》

主の平和。一つの話を紹介させていただきます。

ある広場に目の見えない人が座り、物乞いをしていました。その人の横には空き缶が置かれ、缶の後ろには紙が立てかけてありました。その紙には、「私は盲人です。どうか助けてください。」という文章が書いてありました。わずかなお金を投げるように入れて行く人もいましたが、ほとんどの人は、あまり憐れみを感じない様子で通り過ぎてしまいます。時間が経っても、心をこめて空き缶にお金を入れる人は誰もいませんでした。すると一人の女の人が通りかかりました。彼女は、一度彼の前を通り過ぎてから足を止め、思い直して戻って来ると、缶の後ろに立てかけてあった紙をとり、裏面に何かを書きます。その様子に気づいた目の見えない人は、「誰だろう。」と思い、彼女の靴に触ってみます。書き終わった女の人は、紙を元の位置に戻して去って行きます。目の見えない人には、何を書いたのか分かりませんでした。しかしその後、急にたくさんの人々が心をこめてお金を空き缶に入れ始めます。物乞いの人は、「これはおかしい。あの女性は何をしたのだろうか。」と思います。

そして時間が経ち、紙を書いた女の人がまた戻って来て、物乞いの人の前に立ちました。彼は靴を触ってみて、彼女が紙に何かを書いた人だと気付きます。そこで、「この紙に何を書いたのでしょうか？」と聞きます。すると彼女は、「私もあなたが書いたのと同じことを書きました。ただ言葉を変えただけです。」と答えて去って行きました。その紙には、「今日は本当に美しい日です。しかし、私はそれを見ることはできません。」と書いてありました。その言葉が、読んだ人々の心を動かしたので

す。

さあ、なぜこのような話をしたのか分かりますか。今日の福音(ヨハネ 20:19-31)で、復活されたイエス様が初めて話されたのは、「あなたがたに平和があるように。」という言葉でした。次に話されたのは、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」という言葉、そして最後は「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」という言葉でした。

この三つの言葉と一緒に考えなければならないことがあります。

皆様の心はどのような状態でしょうか。落ち着いているのでしょうか。それとも、毎日何かによってうるさくなっているのでしょうか。『平和』というものは、物理的にも精神的にも心が静かにならなければ感じられないものです。たとえば、怖い環境の中にも落ち着いた心を持てる人がいます。逆に、快い環境の中にも、心がうるさくて本当のよい味を味わえない人もいます。私は復活祭に「復活は体験です。」という話をしました。『平和』というものも同じように、心で『体験』する何かなのです。

私たちはあまりにも多くの音の中で生きています。その音の中に、きれいに聞こえる音があれば幸

いです。しかし、逆に命を殺してしまうような音もたくさん聞こえてきます。しかもそれらの音のほとんどは、私たちの口から出されます。その理由は、心がうるさいからです。私たちは、そのうるさい心から解放されなければなりません。もし、私たちが意識せずに口にした言葉が棘となって人の心を刺すのならば、それがいくらいよい内容の言葉であっても、よくない言葉になってしまいます。なぜならば、『正しさ』というものは、愛がもとにならなければ何の意味もないからです。「私はいつも正しいことを言っている。」と信じていても、その言葉が人を悩ませているのならば、その言葉にどんな意味があるというのでしょうか。

今日、第一の復活の主日を迎えています。本当に『平和』を私たちのものにするためには、各自が自分の心を落ち着かせなければなりません。うるさいところがあれば、それを無くさなければなりません。どんな条件でも、どんな環境でも、「自分の心の責任は自分で負う」という気持ちにならなければなりません。それができれば、何も考えずに言葉を口にするのではなく、一呼吸して、「この言葉がこの人に本当によい話になるのか。」と考えてから口にすることができるでしょう。

人間は、みんなそれぞれの考えを持っています。そして、その考えは必ずぶつかります。「ぶつかることを避けるようにしなさい。」と話しているのではありません。相手が間違えたら直してあげるべきです。しかし、それは落ち着いている心で、何回も振り返ってみて、“これは本当にみ言葉に合う”という確信ができた時に口にしてください。それが必要なことです。

そういう意味で、私たちには心を落ち着かせるための練習が必要です。私には、その練習をするために1981年に手に入れた本があります。ハンス・バルホプというドイツ人が書いた詩ですが、「ああ、こういうことか」と自分なりにうなずいた部分を日本語に訳しましたので、ゆっくり読んで紹介させていただきます。

「沈黙と言葉」

沈黙は、言葉でぎっしり満たされた豊かな世界である。

沈黙は、ただ言葉の諦めではなく、良く話すための条件である。

言葉が終ると沈黙が始まると思われている。

しかし、それは間違えた考えかもしれない。

沈黙は、初めから無数の言葉を持っているのだから。

言語が私たちのために必要なように

沈黙も私たちのために必要なのだ。

沈黙の中で、私たちはようやく語り始める。

沈黙の中で、やっと言語の明瞭な意味が分かり始める。

私たちの言葉は、音と意味とが分けられているが、

沈黙はそれらが一つになった言語を持っている。

私たちは、
雑多な騒音が止まって、沈黙が私たちのものになる時、
ようやくこの世の生き方と
そして病と苦痛について、理解が出来るようになる。

沈黙ではないのに、沈黙を守っているような姿を見せている人もいます。ただ口を閉じることが沈黙ではありません。「あの人とぶつかったら嫌なことになるから。」と思って口を閉じるのは沈黙ではありません。沈黙という言葉を使うのならば、本当に霊的な働きが必要です。

沈黙と言葉には、本当にバランスが必要なのです。しかし、先に必要なのは沈黙です。この人が書いたように、「沈黙は数多い豊かな言語の世界だ」と考えるのが正しいのです。

さあ、『平和』を保ちましょう。その『平和』は心から始まります。いろいろな要らないことに縛られて心を失い、『平和』を失ってしまうことがないようにしましょう。今日の福音に「信じない者ではなくて、信じる者になりなさい。」と書いてあるように、信じる何かがあれば、私たちはどんな条件の中でも対応できると思います。そういうことを考えて、もし私の口によって傷を受けた人がいれば、今日、その人のために祈る時間を持ちましょう。

ありがとうございました。

—ミサの後—

言葉に気をつけるのは誰のためでしょうか。自分のためではなく、相手のためです。相手を生かすためです。相手を生かすことで、自分も生かされるのが福音です。しかし私たちは、目立たないことが良いことだと思い、沈黙します。それは正しい沈黙ではありません。相手のために何かをすることで、自分も生きるのが正しいことです。